

歴史を読む



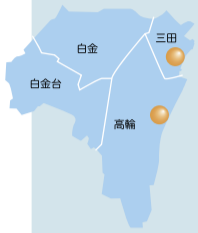
江戸時代、この地区は、東海道からの江戸の入口に当たる高輪大木戸がありました。

京登り、京下り、お伊勢参りなどの旅人の送迎の場所として多くの人の出入りがあり茶屋などもありました。また、東の海を望む絶景の地でもありました。さらに、泉岳寺、東禅寺、済海寺など大きな寺も多くありました。そのため、この地区は、江戸の名所の一つで、浮世絵が多く残されています。これらの浮世絵を見ながら、港区立港郷土資料館学芸員松本健さんから当時の生活についてお話をうかがいました。

月の岬と高輪海岸

今回は、月を見る名所であった月の岬（三田四丁目付近）と高輪海岸（高輪二丁目東側付近）について取り上げました。当時は、満月、十三夜、二十六夜など月を見る行事がさかんでした。

現在の三田四丁目の台地は江戸時代、月の岬と呼ばれ、海から上がる月を見るのに絶好の眺望地でした。「月の岬」は、とてもロマンチックな名前ですね。



また、江戸時代初期、今の第一京浜国道より東側の地区に海浜が整備され、高輪海岸と言われていました。

高輪海岸の海沿いの道（東海道）は風光明媚で、旅人だけではなく遊樂の地として賑わっていました。

二十六夜は、陰暦の一月と七月の二十六日の夜に、阿弥陀観音、勢至の三尊の姿が現れるといわれ、特に、七月二十六日に大勢の人が月見にでかけました。

二十六夜の月は下弦の月で、明け方近く、海から上がるので、夜通し飲み食いしながら月を待っていました。最初は、信仰が目的だったのですが、次第に庶民の楽しみになっていきました。江戸の幕府も、信仰が目的だったので、二十六夜の行事を黙認していたようです。但し、武家の侍と庶民と一緒に楽しむことはなかったようです。



▲月の岬 江戸名所四季の脈 高輪月の景 歌川広重 1847~51年頃 月の岬の茶屋から海に昇る月を見ている図です。

通りに、屋台が並び、茶屋も出ていました。海岸近くの通りで過ごす人や茶屋で飲み食いしながら待つ人もいました。また、お金持ちの商人などは海に舟を出し、舟の上から月を眺めたりしました。

月の岬と高輪海岸は、江戸の月を眺める一番の名所として、大勢の人で賑わい、浮世絵にも多く描かれています。

今は、海岸部には高層ビルが林立し、ネオンや電灯が明るく、海から上がる月を見る習慣もなくなってしまうかもしれません。

高輪海岸



江戸名所図絵 高輪 歌川広重二代 1861~62年頃 今の品川駅付近から月を見えています。



東都名所 高輪二十六夜 歌川国員 1847~51年頃 大木戸当たりから二十六夜の月を待っています。

浮世絵写真
港区立港郷土資料館提供